

追悼のことば

あれから 27 年が経ちますが、あの日のあの時の記憶はまだ鮮明に覚えています。

地震直前の数分前にふと目覚め、2 階から 1 階に降り手洗いに行くと、外で異様に犬が吠えていてどうしたのかと窓を覗くと、外は夕方の様に明るく、空は紫がかった夕景の様に綺麗でどこか不気味でした。

偶然にも起きていた母と言葉を交わし布団に戻った瞬間、地の底から静かにゴォオオオ…という地鳴りが始まり、すべてが揺れ出し、壁が崩れ屋根が落ちてきました。一瞬なのか数分なのかどのくらいなのかわからない間があり、気がつくとも瓦礫と土埃の中、隣で寝ていた筈の上から 2 番目の兄の姿もみえず、ただ何が起きたのかをわからずにいました。

地震という言葉に馴染みがなかった僕は理解が出来ず、不安と恐怖で無我夢中で叫んでいました。それに気づいたのか、瓦礫の中の暗闇から『動けない…助けて、痛い…』と絞り出すような声が聞こえてきました。

兄が危険な状態だと感じ、奇跡的に身動きの取れた僕は助けに行こうとしましたが、兄の所までは瓦礫が邪魔で辿り着けず、必ず助けるからと兄に声を掛けて隙間をぬって自力で這い出しました。

瓦礫の上からみた光景は生涯忘れることのない衝撃的なものでした。

建っていた隣の家や建物が跡形もなく崩れ、地面はひび割れ電信柱は傾き倒れている。見渡す限りが変わり果てて、見知らぬ場所にいる様な錯覚に陥りました。当時まだ 10 歳だった僕には世界が終わったかのように感じるほどでした。

全壊した家の瓦礫の上から助けを叫んでいると、当時 2 歳だった妹を抱えた母と父、そして長男が無事で駆けつけてくれました。

声が聞こえたのか父や母が助けを求めたのかはわかりませんが、どう考えても自分達も大変な中、名前も顔もわからない近隣の人達がどこからと集まり、父や母、長男を手伝い、兄を、そして手遅れではあったのですが、姉の遺体を瓦礫の中から出してくれました。

僕は幼かった為、これも誰なのか見知らぬ人の心遣いだったのでしょう、駐車場の誰かの車から救助活動を見届けていたのを覚えています。

車の中からは姉が無事に助け出された様にみえていたので、近くの診療所に母と行き、

母が診察室から出てきて首を横に振った時は、自分が自分じゃなくなるような、とにかく人生で最も辛い瞬間でした。

7人家族で兄弟が5人と大所帯の我が家は、働き詰めの父と母と、当時まだ17歳だった姉で成り立っていました。家事を手伝い部活動に励み、学校の先生になる夢の為に、友達と遊ぶのも週1回と決め、アルバイトで予備校に通う為のお金を自分で稼ぐ様な勤勉な姉でした。

家族全員が姉の身代わりになれたらと願うほどよく出来た人でした。

少しお茶目なところもあり、震災の前日、母にご飯だからと姉を呼びに行く様に言われて姉を呼びに行ったのですが、一向に返事がなく、部屋を覗くとイヤホンで音楽をノリノリで聴きながら勉強していたので、イタズラ心で頭を振るマネなどをしてふざけたら怒られて、その日、口を聞いてもらえませんでした。

『明日謝ればいいわ』　それが姉との最期でした…

そんなことを許してくれない姉でないとわかっていても、お墓の前で何度も謝りました。最期とわかっていればもっとたくさん話たかったし、もっとわがまま言わずに迷惑もかけなかったのに…

後悔は尽きません。

身をもって知った、当たり前が当たり前じゃないということ。

家族を大切に。

今日を大切に。

姉の犠牲を胸に日々生きていこうとしました。

それでも家族や友人、知人、自分でさえいつ誰がどうなるかわからないある種の脅迫めいた気持ちを、27年間という月日、保ち続けて意識して生きていけるほど僕は強くはありませんでした。

大切を見失い、嘘や過ちもありました。若い自分は時には人を裏切りました。

そんな時いつも立ち返る機会を与えてくれたのは、他ならぬ自分が書いた歌でした。忘れてはいけないと書き留めた言葉を、忘れないメロディにのせて作った歌達です。歌う度に思い出す。単純なことですが、今は仕事としてある種の使命として震災のこの時期が近づくと歌います。

震災学習、生命の授業、ゲストティーチャー、という形で語り部ならぬ『弾き語りベ』という、震災とその後歩んだ人生から経たメッセージを歌にして語り継ぐ。それは僕自身も歌うたびに見失いそうになった大切なものに気づき、見つめ直すための戒めとなりました。

当時 10 歳だった僕が当時の父や母とほとんど変わらない歳になり、あの日あの時に父や母が背負ったものの大きさを少しはわかる様になったように感じます。

僕の父は無口で不器用です。

ある日思い悩んだ時に、生まれてきた理由や答えを感じたことがあるかと父に尋ねてみました。

父は即答で『お前らが生まれてきたことや』と応えてくれました。

無口で不器用だけど実は愛情深い父。

逆に、感情的でわかりやすく愛情を注いでくれ、誰よりも厳しく、それでも誰よりも寛大に粘り強く、僕らを分け隔てなく見守り心配し続けてくれている母。

そんな2人には震災というものは災害というよりも、ただ愛する家族、姉を奪った恨むべきものだと思います。

そんな両親にとって忘れたい出来事を忘れないように歌う僕は、ある種の親不孝かも知れません。

ただ、被災した次の日から僕らが一人で生きていける様になるまで育ててくれたこと、本当に感謝しています。

父のように生まれてきた答えを見つけられるように、母のように信念を貫く強さを持つるように、これからの当たり前じゃない日々を肩肘張り過ぎないように歌い生きていきたいと思っています。

最後にはなりましたが、あの日瓦礫の中から兄を救い出し、姉を運び出してくださった顔も名前も知らない心暖かい人達に心より感謝します。

並びに、こうしてまた歌う以外に大切に立ち返る機会を与えてくださった 1.17 のつどいに関わるすべての方々に感謝します。

令和4年1月17日

田代 作人